

## 報 告

## 看護ケアで使われることばの理解に関する検討

—幼児の生活の中にあることばの調査から—

和田久美子, 濱邊富美子

## 〔論文要旨〕

本研究は、幼稚園児の保護者を対象に幼児期の子どもの日常において、親子間で使うことばを調査し、看護場面で使われていることばの理解に関して検討する。これまでの研究で明らかになっている看護師が幼児に使用することばを、幼児期の子どもをもつ家族を対象に、親子間で使うことばであるかどうかを調査した。204件に配布し、142件の回答が得られた(回収率69.6%)。薬、注射、ガーゼ、救急車、テープ、うがい、入院、包帯は、日常なことばとなっており、専門用語である吸入、血圧測定、抗生剤、軟膏、清拭に関しては、擬音語・擬態語、反復語にしても日常的に使われないことばであった。

Key words : 幼児, 看護ケア, ことば, プレパレーション

## I. はじめに

日本では、1994年に子どもの権利条約が批准された後から、子どもの権利に関する意識が高まった<sup>1)</sup>といわれ、プレパレーションが取り入れられてきた。プレパレーションとは、情報を提供することや代理体験を通して心理的準備への援助を行うことである。近年、小児医療ではインフォームド・アセントという考え方が用いられるようになった。インフォームド・アセントとは子どもの年齢や理解度に応じた方法で、治療などに参加することの説明を行い、その了解(Affirmative Agreement)を得るといものである。アメリカ小児科学会によると、インフォームド・アセントの実践に必要な要素としてなされる検査や処置の内容とその結果について子どもに説明することが挙げられている。プレパレーションは、インフォームド・コンセントおよびインフォームド・アセントを行うための具

体的な手段といえるであろう。子どもに説明する際にわかりやすいことばで説明し、承諾を得る必要性がある<sup>2-5)</sup>といわれている。説明する方法として、さまざまなツールが使用されているが、子どもへの説明・ことばに関して、子どもを励ます態度や言動は子どもの不安を軽減する<sup>6)</sup>、子どもにどのようなことばを用いて説明するのかを具体的な例を示すことが効果を促すことにつながる<sup>7)</sup>、幼児後期の子どもに予防接種を行う前に何が起きるかを説明した時には、説明を聞き協力的であった<sup>8)</sup>などの報告がある。しかし、看護場面で説明に用いることばを子ども側から検討したものは少なく、ことばそのものに注目し、どのようなことばを用いるのかという検討をしたものはほとんどみられない。子どもが意思決定していくためには、子どもが理解できるようなことばを用いて説明していくことが必要である。

医療という非日常的な状況の中でも子どもが理解で

A Study on the Understanding of the Term Used in Nursing Care from Term is the Lives of Preschool Children

Kumiko WADA, Fumiko HAMABE

東海大学健康科学部看護学科 (研究職/看護師)

別刷請求先: 和田久美子 東海大学健康科学部看護学科 〒259-1193 神奈川県伊勢原市下糟屋143

Tel: 0463-93-1121 Fax: 0463-90-2052

[2572]

受付 13.10.24

採用 14. 9. 6

きることばを明らかにすることで、日常の看護ケア、治療の一つ一つをわかりやすく説明することができるようになるであろう。また、子どもを理解するという面からも重要な意味を持つことになる。特に初めて経験することに対しては、子どもの不安や恐怖が強くなる。子どもの不安や恐怖を最低限にするためにも説明する時のことばは重要である。

これまで、処置・看護ケア場面に看護師が幼児に対して用いることばについて調査<sup>9)</sup>が行われている。その結果、看護師は、幼児後期の子どもに対して、日常生活でも使われるような平易なことば、擬音語・擬態語、反復語を多く使っていることが明らかになっている<sup>9-11)</sup>。しかし、子ども側からの理解という側面から検討されたものは少ない。ことばは文脈に埋め込まれ、生活経験と結びついて初めて意味を持ったことばとして使いこなせるようになる<sup>12)</sup>といわれている。したがって、子どもが理解できることばは、子どもの生活の中にあることばと考えられる。本研究では、これまでの研究で明らかになっている看護師が幼児に使用することばを、幼児期の子どもをもつ家族を対象に、親子間で使うことばであるかどうかを調査した。これによって、看護場面で使われていることばが子どもに理解されていることばであるかどうかの一つの判断になると考える。

## II. 目 的

本研究では、幼稚園児の保護者を対象に幼児期の子どもの日常において、親子間で使うことばを調査し、看護場面で使われていることばの理解に関して検討する。

## III. 方 法

### 1. 研究対象者

A 幼稚園の2歳児、3歳児、4歳児、5歳児204名のそれぞれの保護者を対象とした。一家庭から園児が2名通っている場合もあるため、園児1名に対して1調査票を配布し、1件とした。204件配布した。

### 2. データ収集の方法

幼稚園の代表者に調査の説明をし、協力を得た。幼稚園代表者の承諾を得た後に幼稚園利用の保護者に紙面によって研究説明を行い、承諾を得た保護者に調査票記入を行ってもらい、回収した。調査期間は、2011年7月であった。調査対象とした幼稚園は、近年は東

京近郊のベッドタウンとなっている地域の大学付属の幼稚園である。

## 3. 調査内容

それぞれのことばについて、自分の子どもに対して項目の内容を表現する時に調査票にある「ことば」を使うか使わないかを調査した。使ったことがないことばに関しては、「使わない」を選択することとした。

診療治療のことばとして、薬、聴診、注射、検査、レントゲン、手術、点滴、吸入、血圧測定、抗生剤、軟膏に関することば28語を調査した。医療器具のことばとして、ガーゼ、包帯、ギプス、注射器に関することば7語を調査した。その他のことばとして、うがい、救急車、車椅子、テープ、退院、入院、清拭に関することば23語を調査した。これらのことばは先行研究<sup>10)</sup>を参考に看護師がよく使用することばを用いた。

## 4. 倫理的配慮

本研究は、東海大学健康科学部倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には、研究目的と意義、協力は任意であること、匿名性の保持の方法について文書によって説明し、調査票の返信をもって調査協力への同意とした。

## IV. 結 果

204件に配布し、142件の回答が得られた（回収率69.6%）（表）。

### 1. 診療治療に関することば

診療治療に関することばについては、薬に関しては「(お)くすり」100%、聴診に関しては「もしもし」86.6%、注射に関しては「(お)ちゅうしゃ」90.1%、検査に関しては「けんさ」71.1%、レントゲンに関しては「(お)しゃしん」53.5%、手術に関しては「しゅじゅつ」59.2%、点滴に関しては「てんてき」52.8%が多く使われていた。しかし、吸入（「きゅうにゅう」25.4%、「モクモク」18.3%、「モクモクサン」2.1%、「シュワシュワ」2.8%、「シュー」6.3%、「シューシュー」16.2%）、血圧測定（「けつあつそくてい」3.5%、「けつあつはかる」21.2%、「シュツシュ」5.6%、「シュポシュポ」4.9%、「シュー」0%）、抗生剤（「こうせいざい」28.9%）、軟膏（「なんこう」21.8%）は、今回の調査のことばはあまり使われていないという結果であった。

表 調査したことば

n = 142

	項目	ことば	使用割合(%)
診察・治療	薬	(お) くすり	100.0
		オック	28.0
		にがいにがいに	1.4
	聴診	ちょうしん	8.5
		もしもし	86.6
	注射	(お) ちゅうしゃ	90.1
		イタイタイ	2.1
		チクン	6.3
		チックン	39.4
	検査	けんさ	71.1
		もしもし	20.4
	レントゲン	レントゲン (お) しゃしん	39.4 53.5
	手術	しゅじゅつ	59.2
	点滴	てんてき	52.8
	吸入	きゅうにゅう	25.4
		モクモク	18.3
		モクモクサン	2.1
		シュワシュワ	2.8
		シュー	6.3
		シューシュー	16.2
血圧測定	けつあつそくてい	3.5	
	けつあつはかる	21.1	
	シュツシュ	5.6	
	シュポシュポ	4.9	
	シュー	0.0	
抗生剤	こうせいざい	28.9	
軟膏	なんこう	21.8	
医療器具	ガーゼ	ガーゼ	66.2
	包帯	ほうたい	71.8
		ほうたいさん	2.1
		まきまき	16.2
		くるくる	9.2
ギプス	ギプス	25.4	
注射器	ちゅうしゃき	51.4	
その他	うがい	うがい	76.8
		ガラガラ	23.9
		ガラガラペッ	55.6
		グシュグシュ	0.0
		グジュグジュベッ	7.7
		グチュグチュベッ	9.9
		ブクブク	14.1
		ブクブクベッ	19.0
	救急車	きゅうきゅうしゃ	93.0
		ピーポー	20.4
		ピーポーピーポー	19.0
	車椅子	くるまいす	70.4
		(お) くるま	1.4
	テープ	テープ	78.2
		ベッタン	30.3
	退院	たいいん	53.5
	入院	にゅういん	65.5
		(お) とまり	24.6
	清拭 (体を拭くこと)	せいしき	0.0
(お) からだふき		30.3	
からだふきふき		28.2	
きれいきれい		23.9	
ふきふき		15.5	

2. 医療器具に関することば

医療器具に関することばについては、ガーゼに関しては「ガーゼ」66.2%，包帯に関しては「ほうたい」71.8%，注射器に関しては「ちゅうしゃき」51.4%が多く使われていた。ギプス（25.4%）に関しては、今回の調査のことばはあまり使われていないという結果であった。

3. その他

その他のことばでは、うがいにに関しては「うがい」76.8%，救急車に関しては「きゅうきゅうしゃ」93.0%，車椅子に関しては「くるまいす」70.4%，テープに関しては「テープ」78.2%，退院に関しては「たいいん」53.5%，入院に関しては「にゅういん」65.5%が多く使われていた。清拭（「せいしき」0%，「(お) からだふき」30.3%，「からだふきふき」28.2%，「きれいきれい」23.9%，「ふきふき」15.5%）に関しては、今回の調査のことばはあまり使われていないという結果であった。

V. 考 察

よく使われていることばとして、診療治療に関することばでは「(お) くすり」, 「(お) ちゅうしゃ」, 「けんさ」, 医療器具に関することばでは「ガーゼ」, 「ほうたい」, その他のことばでは「うがい」, 「きゅうきゅうしゃ」, 「くるまいす」, 「テープ」, 「にゅういん」がそのまま使われることが多かった。また、そのまものことばを日常のことばに変えて使われているものは、診療治療に関することばでは聴診を表す「もしもし」, レントゲンを表す「(お) しゃしん」であった。「しゅじゅつ」, 「てんてき」を使うことは半数ほどであった。診療治療に関することばの「吸入」, 「血圧測定」, 「抗生剤」, 「軟膏」を意味することば、医療器具に関することばの「ギプス」, その他のことばの「清拭」を意味することばはあまり使われていない。

よく使われていることばは、日常に存在していることばとっていいであろう。日常的に使われないことばは、そのままのことばで使われている。経験がないことに関しては、そのままのことばで表現されることが多い。反対に経験することが多く、日常に存在していないことばは、例えば「もしもし（聴診）」など、日常で使うことばに変化させて使うと推測される。これは、経験が多いことから、イメージができ、日常に

あることばに置き換えることができるためであると考えられる。経験が少なく、日常でも使わないことばは、「清拭」に関連することばのように、非常に使われることが少なく、他のことばにも置き換えられていないと推測される。いわゆる専門用語がこれらのことばといえる。看護師に対することばの調査では、専門的なことばは用いられることが少なく、擬音語・擬態語を用いることが多いという結果であった<sup>9)</sup>。しかし、今回の調査では、擬音語・擬態語として表現をしても使用は少ない、日常で使われていないことばであった。擬音語・擬態語は、音や声や状態をまねて表現していることばであるためイメージしやすいといわれており、看護師はよく使っていたと考える。しかし、全く経験がないことに関しては、擬音語・擬態語を使用しても理解できないことが考えられる。入院している子どもには、日常生活で用いたり、経験していることに関連したことばを使用することが大切であるといえる。特に専門用語については経験がないことばが多いことから、子どもがイメージしにくく、理解できないことが多い。これらの経験がないことに関しては、どのようなことばを選び、表現するかを検討することが重要である。また、初めて使用する時には、実際のものを見せながら、わかりやすいことばを選択する必要が挙げられる。

医師による病状説明が子どもに行われる時の看護師の役割<sup>13)</sup>では、子ども主体の説明を行うことは重要な看護師役割であると述べている。しかし、看護師の実践度は低い項目であった。また、先天性疾患をもつ幼児・学童の母親の子どもへの疾患の説明と<sup>14)</sup>では、医療者は、わかりやすいことばや絵本を使って説明し、母親にとっては子どもへの説明のモデルとなるようにする必要性を示している。子どもが、プリパレーションという形で、疾患や治療に対する理解を深めるためにも、ことばに関する検討が重要である。

2004年、国立国語研究所の調査<sup>15)</sup>によると、国民の8割が病院で使われることばをわかりにくいと感じており、医療者のことばの工夫が求められていた。また、わかりにくい原因として、なじみのないことばであること、専門的で難解であること、患者の不安定な心理状態であることなどが挙げられている。15歳以上を対象とした調査からも医療者の使うことばの理解の難しさがわかる。さらに、子どもは発達過程にあり、理解という面でも難しい部分が多い。この調査から、病院

のことばをわかりやすくする工夫の提案が行われている。これらのことから子どもを対象に理解しやすいことばを検討していくことは重要であるといえる。

## VI. 結 論

よく使われていることばは、日常に存在していることばであり、日常的に使われないことばは、そのままのことばで使われている。経験がないことに関しては、そのままのことばで表現されることが多い。また、経験することが多く、日常に存在していないことばは、日常で使うことばに変化させて使い、経験が少なく、日常でも使わないことばは他のことばにも置き換えられていない。また、擬音語・擬態語として表現をしても日常で使われていないことばの使用は少なかった。全く経験がないことに関しては、擬音語・擬態語を使用しても理解できないことが考えられた。入院している子どもには、日常生活で使ったり、経験していることに関連したことばを使用することが大切である。

## 謝 辞

本研究は、2010年度東海大学健康科学部特別研究費の助成を受け、第22回小児看護学術集会で発表したものに加筆修正したものである。この研究にあたり、調査にご協力くださいました幼稚園の先生方、保護者の皆様に深く感謝いたします。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 及川郁子, 田代弘子編. 病気の子どものプレパレーション. 中央法規, 2007.
- 2) 土屋博之. 手術同意とインフォームド・コンセント. 小児内科 1994; 26 (4): 533-535.
- 3) 馬場一雄. 子どもの患者とインフォームド・コンセント 子どもの理解力, 認知力に合わせた話し方をする. からだの科学 1995; 181: 36-39.
- 4) 片田範子. 子どものQOLと子どもの権利 手術を受ける子どもの看護を中心に. 小児看護 1997; 20 (5): 651-654.
- 5) 後藤弘子. 医療と子どもの権利子どもの人権双書4 医療と子どもの人権 その法的側面. 小児内科 1998; 26 (4): 513-517.
- 6) 中村美保, 兼松百合子, 小川京子. 医療処置をうける

- 小児の痛みの程度と行動に表れる反応. 千葉大学看護学部紀要 1993 ; 15 : 45-52.
- 7) 小関和代. 幼児期の外科小手術に対する心理的準備. 看護研究 1984 ; 17 (3) : 83-91.
- 8) Ross-Trevor J. Informed Consent and the Treatment of Children. Nursing Stand 1996 ; 10 (5) : 46-48.
- 9) 和田久美子. 看護場面で用いられる語彙—医療に関する語彙—. 第55回日本小児保健学会講演集, 2008 : 229.
- 10) 和田久美子. 幼児への言語的対応における看護師の特性—保育士との比較を通して—. 小児保健研究 2008 ; 67 (4) : 557-564.
- 11) 和田久美子. 処置・看護ケア場面における幼児に対する看護師のことは. 小児保健研究 2012 ; 71 (1) : 85-91.
- 12) 内田伸子編. 新・児童心理学講座6 言語機能の発達. 金子書房, 1990 : 13-35.
- 13) 山下早苗, 神ノ川 博, 長澤 芳. 医師による病名病状説明が子どもに行われる時の看護師役割. 日本小児看護学会誌 2012 ; 21 (2) : 49-54.
- 14) 田畑久江. 先天性心疾患をもつ幼児・学童の母親の子どもへの疾患の説明と思い. 日本小児看護学会誌 2010 ; 19 (2) : 17-24.

- 15) 国立国語研究所「病院の言葉」委員会編. 病院の言葉をわかりやすく 工夫の提案. 勁草書房, 2009.

### [Summary]

In this study on the legal guardians of kindergarteners, the term used between parents and their preschool children in day to day childcare and the comprehension of that term were examined. We examined whether the term used by nurses towards preschool children previously established in earlier studies was also used between parents and their children in families with preschool children. The study was distributed among 204 subjects, with 142 of those responding (response rate of 69.9%). Medicine, injection, gauze, ambulance, tape, gargle, hospitalization, and bandage were established as everyday words, while technical terms like inhalation, blood pressure measurement, antibiotics, ointment, and sponge bath were not used on a day to day basis in either an onomatopoeic or repetitive words.

### [Key words]

preschool children, nursing care, term, preparation